



女性が受診すべきかどうか悩む状態の一つに「帯下」があります。女性の性器の内面は粘膜で覆われていますので、口の中と同じように常に粘液で潤われています。粘液は子宮、膣や外陰の粘膜から分泌されます。この粘液が性器の外に排泄されたものが「帯下」で、下り物とも言います。

健康な膣内には乳酸菌が存在しており、粘液に含まれる糖分を乳酸に分解して弱酸性に保ち、外部からの細菌やウイルスの進入を防ぎます。これを膣の自浄作用と言います(図参照)。

通常は透明または白色で、のり状かクリーム状ですが、下着に付くと乾燥などで変色することもあります。また、子宮や膣の粘膜はホルモンの影響を強く受けますので、排卵期には透

おりものの増加

い帯下になります。帯下の量や性状は個人差がとて大きく、他人との比較は意味がありません。自分の日常の帯下と比べて、臭いや色が気になったり、かゆみを感じる場合には異常かもしれません。

膣内の乳酸菌は細菌の仲間ですので、風邪薬や抗生剤を飲むと乳酸菌が弱り、カンジタというカビや悪玉の細菌が増えます。また、妊娠や糖尿病などで体の抵抗力が落ちて、外部から細菌が進入しやすくなります。



産婦人科医

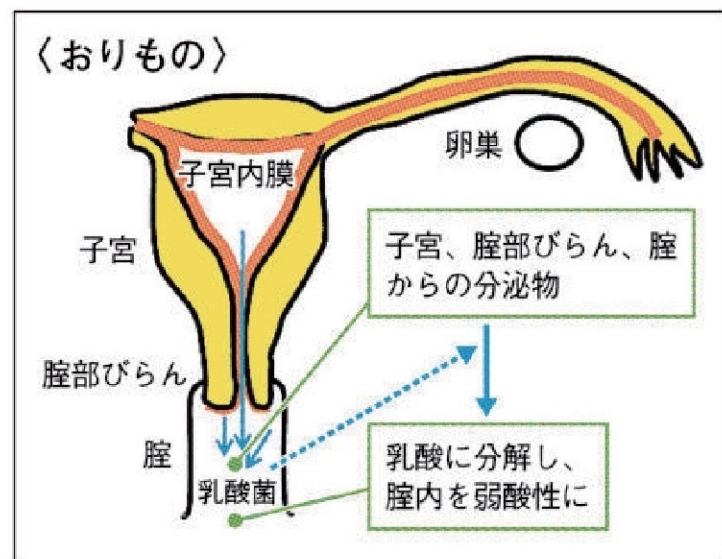
今井篤志氏

かゆみ、色、臭いに注意

明な水っぽい帯下が増量し、排卵期には粘り気の強

例えば、カンジタ菌が膣内で増えたとヨーグルト状あるいは酒かす状の帯下となり、強い痒みや臭いが現れます。悪玉菌の場合には、悪臭を伴う膿のような帯下になります。泡立つような白色あるいは黄色の帯下は、かゆみはあまりありません。泡立つような白色あるいは黄色の帯下は、ホルモンの影響を受け、内

下はトリコモナスという微生物の進入が強く疑われます。他にもクラミジアや淋菌が進入しても帯下の増加が見られます。帯下の他の原因として、膣部びらんがあります。ホルモンの影響を受け、内



外まで下りてきている状態です。膣部びらんとは病気でなく、妊娠可能な女性の8割に見られます。子宮内の粘膜ですからもろい状態で、個人によっては粘液の分泌が多くなったり、悪玉菌が付着しやすくなります。帯下に血液が混じったり(1月6日付本欄参照)、肉汁のような時にはがんが隠れている可能性があります。

思春期前や閉経後はホルモンの働きがないため、粘液の分泌そのものがなく、通常帯下は認めません。帯下があるイコール異常です。

膣は通常、自ら弱酸性に保ち外部からの病原体が進入するのを防いでいます。しかし、帯下の色や臭いが通常と違ったり、かゆみなどの不快感が現れた場合には、ご相談ください。早期発見、早期治療が大切です。重い病気であればなおさらです。

(松波総合病院腫瘍内分泌センター長、羽島郡笠松町田代)

自浄作用あるが早期治療を